

## 会員の声

# 論文疑惑騒動に思う

日本赤十字広島看護大学 宇野 久光

今年、STAP細胞論文や薬物の臨床データの偽造などが、マスコミの好餌となった。前者の基礎研究の場合は、基本的に研究者間で解決すべき事柄であり、製薬会社が関与する臨床研究とは性質が異なる。

「STAP論文」(Nature :505, 641-47, 2015)のLow pH triggers fate conversion in somatic cellsの項は、実際の実験経緯が理解でき、多能性指標*Oct4*遺伝子の発現細胞が一定程度認められたものと思われる。以後のSTAP細胞の増殖能や分化能の実験結果には、納得理解できないところがあった。

発表会見時のObokata氏の「研究途中何度もやめてやる！と思いました」との発言に違和感を覚えた。自然界の真理に迫る主体としての謙虚さが感じられなかったからである。

今回のマスコミ狂想曲で、かのピルトダウン人事件を思い出した。これは20世紀初頭の英国のピルトダウンの地で「発見」された化石頭蓋骨の捏造事件である。

アマチュア考古学者のC. ドーソンが同地から「発見」した頭蓋骨を、大英博物館のA. S. ウッドワード卿は*Eoanthropus dawsoni*の学名で発表した。その頭蓋骨は現生人類のように大きく、下顎骨は類人猿のようで、更新世初期の現生人類の最古の祖先とされた(写真)。半世紀後に骨のフッ素測定法により、この化石が現世人の頭骨とオランウータンの下顎骨からなる捏造と分かるまで、この化石について250編もの論文が発表された。Nature誌は、当時大英博物館にいた某動物学者が化石捏造の真犯人とする説を1996年に掲載した。

夏目漱石は「道楽と職業」という講演で、「博士の研究の多くは針の先で井戸を掘るような仕事をするのです。深いことは深い…いかにせん面積が非常に狭い。

哲学者とか科学者というものは直接世間の実生活に関係の遠い方面をのみ研究しているのだから、世の中に気に入ろうとしたって気に入れるわけでもなし…。

今の世で彼らは…直接世間と取引しては食っていけないからたいていは政府の保護の下に大学教授とか何とかいう役になってやっと寿命を

つないでいる」

と、科学者や哲学者は、世間と利害関係を直接持てない人種と定義している。

量子電磁気力学の繰り込み理論でノーベル賞を受賞した故朝永振一郎先生は、「鏡の中の世界」というエッセイで、理化学研究所について、

「はいつてみておどろいたのは、まことに自由な雰囲気である。これは必ずしもひとり仁科研究室ばかりではなく、理研全体がそうなのだが、じつに何もかもこのびのびとしている」

「私のいた仁科研究室などは、しょっちゅう大赤字を出すので有名なところであった…新しい研究というものはどっちに進んでいくか予定することがそもそも無理なので、相当な赤字の出ることは当然なのだ…仁科研究室の研究などは、特許にもならず事業にもならない純粋研究ばかりだったが、少しもかたみのせまいことはなかったのである」

と、「科学者の自由な楽園」を懐かしがっておられた。

今回の理研CDBのマスコミを使った研究成果の売り込みは、マスコミの痛いしっぺ返しにあった。漱石が喝破しているように、研究者は、「世間と直接取引をする」という点において、マスコミとは立脚点が異なるのである。

「分子進化の中立説」でノーベル賞候補であった故木村資生先生は、世間と科学の関係について、「あまり功名心の強い人は、科学の分野に来て欲しくない」といわれていた。私は若かりし頃、先生の後継者である太田朋子先生に、「木村先生は騒がしい人はお嫌いです」といわれて、注意されたことがある。



「ピルトダウン人」頭蓋骨と研究者達 (John Cooke, 1915, GEOLOGICAL SOCIETY OF LONDON)